

## 第十二章 事 故

工事の事故は可成多數に上つてゐる。其の中で従事員の死傷者を生じたものも多數あるが、人命を損じた大きな事故は3つある。何れも崩壊事故であつて、其の1つは東口 990 呎附近のもの、他は西口であつて 4,950 呎の事故と 10,800 呎附近の事故とである。10,800 呎附近の事故は北伊豆地震に依るものである。以下順次述ぶることとする。尙北伊豆地震に就いては、特殊篇第七章に於て纏めて記述することとした。上記崩壊事故の外に湧水事故の大きなものが3つある。東口 9,000 呎附近のものに就いては特殊篇第三章に於て述べ、西口 7,000 呎附近のものは一般篇第十章に述べてある。又西口 12,000 呎附近の事故に就いては特殊篇第六章に於て述べてある。

### 第一節 東口 990 呎附近崩壊事故

#### (1) 崩壊當時の状況

大正<sup>10</sup>~~14~~年4月1日午後4時20分東口990呎穹拱煉瓦石積完成終端より内部俄然崩壊し、支保工拱架並足場を倒潰し木材並岩片949呎附近迄堆積し、従業員建築工夫長細川治平外32名を埋没或は閉塞するの慘狀を呈するに至つた。

#### (2) 崩壊當時作業の状況並遭難者氏名

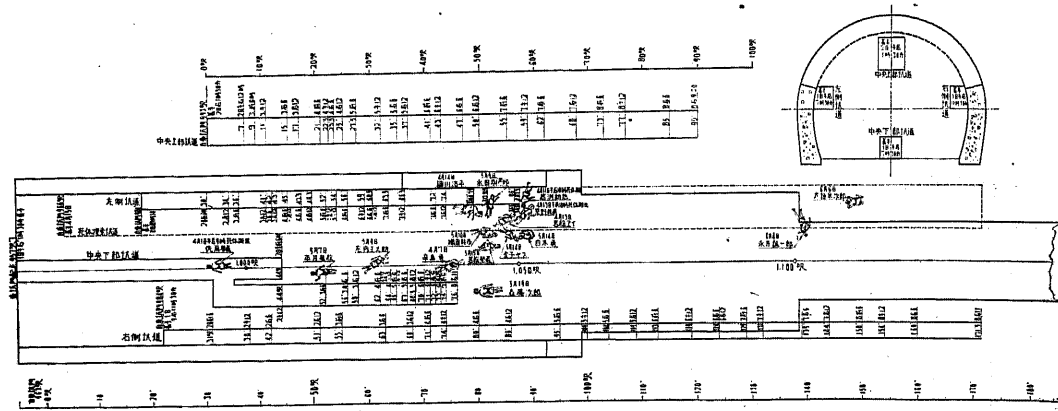
陥落當日は朔日の爲め從來の慣習の如く入坑者例日に比し少く且午後壓氣機修繕の爲一時送風を中止するの必要があつたから、鑿岩夫は正午より午後6時に至る當番は作業を休止し、又4,395呎附近底設導坑に於て支保構組立の爲建築工夫1名並號令、斧夫、人夫等7名が作業して居つたが、午後2時工を終へて出坑した。尙1,095呎附近に於て第3柱又7の桁組立の爲建築工夫1名斧夫4名從事して居つたが、午後3時頃終業の上出坑した。且996呎より1,029呎間セントル検査の爲省のもの並請負會社員外1名入坑して居つたが午後3時終了の上出坑して居つたので、崩壊當時に於ける坑内作業は1,029呎より1,055呎間左側々壁混凝土並に1,095呎より1,689呎間に互る礫搬出をして居り、他は下水掃除、坑内見廻り並に煉瓦積準備作業に從事して居つたに過ぎなかつたので、遭難者比較的僅少であつたのは不幸中の幸である。

遭難者氏名は次の通りである。

自1,029呎至1,055呎間左側々壁混凝土工に從事せる者

建設事務所 建築工夫長、山形縣 細川治平

鐵道工業會社 人夫 大分縣 辛島 勇 人夫 秋田縣 京野 鐵三



第 249 圖 隧道崩壊箇所 救助坑道進行表

人夫	岩手縣	岩淵 助惣	人夫	大阪府	織田 龍市
同	山形縣	佐藤 慶三	同	京都府	森 梅二郎
同	鹿兒島縣	若松 榮藏	同	長野縣	長田 要市
同	長野縣	白木 勇	女人夫	山形縣	佐藤ヤスエ
女人夫	鹿兒島縣	若松 エイ			

自 1,095 呎至 1,623 呎間礮運搬に従事せる者

鐵道工業會社 人夫	世話役	富山縣	安田 克作	人夫	靜岡縣	扇野 多作
同 人夫		靜岡縣	勝又 七衛	同 人夫	德島縣	西村伊三郎
同 同		山形縣	遠田重一郎	同 同	山形縣	遠田嘉之次
同 同		同	池田 勇次	同 同	秋田縣	武田 周次
同 同		秋田縣	齋藤 末藏	同 同	同	伊藤三之助

鐵道工業會社 同 秋田縣 伊藤忠太郎

坑内雜業 (下水掃除)

鐵道工業會社 人夫	秋田縣	永井誠一郎	人夫	富山縣	大垣米太郎
-----------	-----	-------	----	-----	-------

煉瓦積準備自 996 呎至 1,029 呎間

鐵道工業會社 人夫	神奈川縣	平井 福松	人夫	栃木縣	古内玉之助
-----------	------	-------	----	-----	-------

坑内見廻

鐵道工業會社 社員	新潟縣	飯田 清太	號令	大分縣	門屋 盛一
-----------	-----	-------	----	-----	-------

坑夫 群馬縣 谷口 榮平

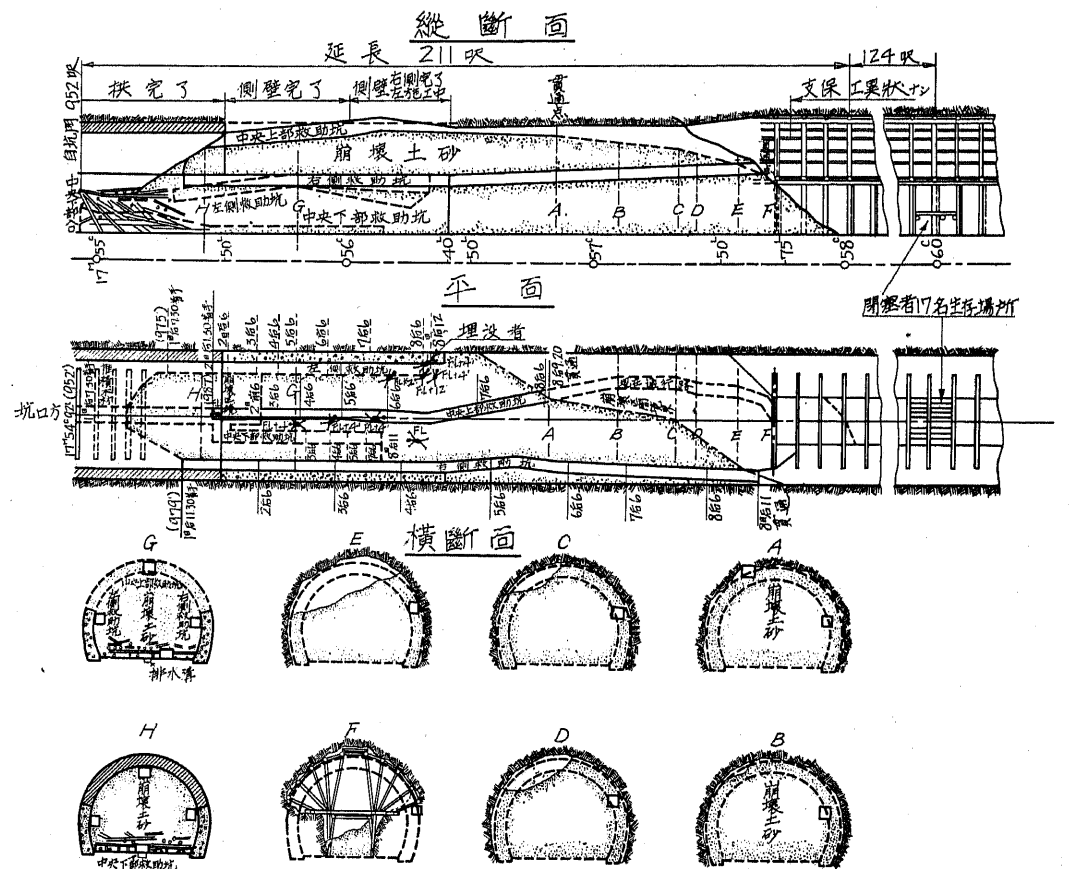
自 1,029 呎至 1,161 呎中脊掘鑿工

鐵道工業會社 號令 島根縣 小椋 熊三 坑夫 栃木縣 駒場 周七  
 坑夫 愛知縣 栗田 敏藏 計 33 名

而して前記號令, 坑夫, 5 名中 4 名は既に今回の如き災變の經驗を有して居つた。

(3) 救助方法及其の經過

陷落の報に接するや直ちに従事員全部を召集し, 部署を定め埋没者を救助するの目的を以て, 即時散亂せる木材並に岩瀝を取片付け, 午後 7 時半中央下部假下水上部に沿うて 1 個及左側々壁に沿うて 1 個の坑道の開鑿に着手した。午後 11 時半右側壁上部に沿うて尙 1 個の坑道の開鑿に着手する事が出来た。翌 2 日朝危険を冒して中央上部に尙 1 個の坑道を設くる事に決し, 西口特定請負人鹿島組より應援に來た者及尙同組より熟練せる斧夫を選抜召集し, 之に當てる事にした。直ちに開鑿作業に着手した。時に同日午後 1 時半爾來四坑道共銳意作業の進捗を計つた。非常なる障害に遭



第 250 圖 東口崩壊事故狀況圖

遇したが危険を冒し8日午後9時20分中央上部坑道先づ崩壊岩石の堆積せる上部空間に貫通し猶進んで支保工を施し、救助坑を設け捜索隊を入れた所生存者17名を発見した。時に午後11時同時刻右側坑道も亦貫通した、陥落より7晝夜を費した。175時間後生存者飯田清太以下17名を救助する事が出来た。尙崩壊當日午後8時半頃送風鐵管を打ち又は鐵管口に口を當て大聲にて呼び坑奥生存者と通信を試みたが、崩壊箇所途中、都合に依り鐵管の屈曲部に長15呎の装甲護謨管を使用しており、之が墜落せる木材等に壓迫された爲か又は其他に損傷あつた爲か再三の通信も應答が無かつた。次に中央下部坑道開鑿工事進行して、装甲護謨管の先にある鐵管に達した時、該鐵管を信號せし際にも亦應答は無かつた、又生存者も坑奥にて同じく送風鐵管に依り再三通信を試みたのであつたが、全く其の効果が無かつた。

#### (4) 救助者の経過

8日午後11時中央上部坑道通路辛ふじて通ずるや、林野雇外4名危険を冒し坑内に侵入捜索した。直ちに1,293呎施工基面上に丸太を横たへ浸水々面上約1呎の處に松板を敷き並べ鐵道工業會社員、飯田清太以下17名横臥無事生存してゐるのを発見した。直ちに救護に努め途中保護援助をしながら、漸次自力に依り徒歩上部坑道から出て、人の肩に依り坑内501呎に設置せる假救護所に收容し安靜せしめ、直ちに山形囑託醫及鐵道病院よりの派遣醫師其他の手當を受け、10日夕更に靜養の爲請負人所有家屋に收容した。本收容所に引移し11日夕全部殆んど回復各自々宅に引取つた。生存者何れも比較的元氣で在つたのは會社員飯田清太及閉塞者中經驗ある年若き元氣なる號令門屋守一が居て、能く一同を指導し計畫がよく、臨機の處置を取り意氣の阻喪を防ぎ勢力を空費しない様にした爲である。

#### (5) 其の後の捜索方法

閉塞者17名を救助するや直ちに全力を盡し埋没者の捜索に努め崩壊の状況及陥落の作業状況より察し概ね作業場所又は其の附近に密接して埋没せる者と認め、中央下部及左側坑道より岐路を分ち捜索し傍ら屍體發掘に努めた。発見する屍體は多くは拱架、支保材、レール等に壓迫埋没されてゐて、之を取り出すには非常なる辛苦を要するのみならず、之等の支障物を除去する爲直ちに上部地層に弛みを與へ、本坑道に非常なる危険を與ふると同時に目下唯一の交通路たる中央上部坑道に悪影響を及ぼすを以て細心の注意と充分なる防禦法を施行し徐々に取出すの必要があるので進歩意の如くならず、9日午後3時中央下部坑道1,048呎附近にて屍體1個を発見した。左側坑道1,048呎附近にて10日午後10時屍體1個発見、翌11日午後10時半發掘した。尙引續き極力捜索に努め、15日午後6時迄に左側坑道は進行89呎に及び13日午前4時1,052呎に於て屍體1個発見同日午前10時發掘、尙同日午後1時1,052呎に於て女人夫屍體1個発見同日午後5時半發掘、14日午前1,042呎に於て建築工夫長細川治平の屍體発見、同日午後3時發掘した。中央下部坑道は進行

86呎に達したが其の後屍體を発見するに至らなかつた。8日午後11時1,293呎附近に集合して居た生存者を悉く救助收容した際、彼等の言に依り最早坑奥には生存者の無いことはわかつたが萬一の遺留者の爲及支保工其他に異状なきやを確むる爲、9日朝入坑せしに2,151呎附近に至り炭酸瓦斯鬱積し居り燈火も點かず入坑する事が出来なかつた。依つて送風管に應急修理を施し護謨管を以て漸く送風した。終夜換氣の上翌10日朝更に入坑し2,613呎附近に達したが尙且炭酸瓦斯の爲、之より奥には進む事が出来なかつた。同日午後送風管の修繕漸く終了し、徑4吋鐵管を以て送風する事が出来る様になつた。11日朝酸素罐を携へ炭酸瓦斯の量少くも $1/100$ を含有する中を進入し漸く導坑先端4,468呎に達し何等異状なき事を確むることが出来た。

其の後尙晝夜送風を繼續し換氣に努めたが15日正午2,217呎(當日最も空氣の悪しき處)に於てオルベルト炭酸計にて測定したが炭酸瓦斯の量尙55/1000に達してゐた。

#### (6) 崩壊の區域及狀況

崩壊は996呎穹拱煉瓦積終點に始まり左側1,085呎右側1,141呎に終り即ち左側89呎右側145呎に亙り隧道は全く閉塞され963呎より1,144呎に至る間は支保工架拱足場等全部倒潰し、土砂は949呎より1,161呎に至る即ち延長211呎の區間に落下してゐた。

而して1,085呎より1,141呎に至る斜線に沿うて左側は掘鑿當時の儘穹窿狀に殘存し1,144呎以西は支保工其他に異状を認めなかつた。坑奥には相當の湧水があつた故、一時水位を深めた模様である。坑道貫通の後取調べた所崩壊終點に於て浸水は施工基面上約1呎もあり、岩礫の空隙を通じて排水して居り空氣の流通を悪くしたのであらう。又送風鐵管は996呎附近に於て中繼接續せる装甲護謨管は支保材の爲壓迫せられてゐた。此處にて送風の過半を阻害して終つたので、其の坑奥に於て尙洩氣の音が聞えたので坑内には尙鐵管に依り幾分通風が出来たものと信じてゐた。生存者の言ふ所に依れば鐵管に依り通風は無しとの事なれば、或は崩壊土砂の下に於て鐵管が破壊されて居つたものかも知れない。尙生存者は閉塞中浸水區間水中に於てマニホールドを抜いた爲其の口より水は鐵管中に流れ込んだと思ふ。崩壊中心は詳かでないが中央下部坑道より調査すれば墜落した大引材は其の位置963呎に於て線路基面上最も高く坑奥に進むに従ひ順次其の高さを減じ、1,039呎に於ては殆ど地盤に接して落下して居る。又右側坑道開鑿に際し1,083呎より1,038呎に至る間隧道の中心に沿うて長約20呎の一大岩塊(厚さは不明なるもの6,7尺ならん)が落下してゐた。之等の事實より推察するに崩壊の中心點は此の附近であらう。崩壊は救助された生存者の言を綜合して見ると、崩壊は2回であり第1第2の崩壊の間隔は1,2分に過ぎなかつた様である。而して最初の崩壊は非常に急速に起り破壊の程度も激烈であつた事は是迄発見された屍體の位置に依り明かである。即ち何れも作業して居つたと想像される位置に於て殆ど死んで居り、脱出する途次に於て死んだものと認められるものがない。崩壊箇所附近の岩質は輝石安山岩であつて831呎附近は

灰色を帯び軟弱なる部分（輝石安山岩の變質せるもの）を除いては、黒色であり其他は堅硬であつた。今回崩壊せる区域内は大部分鑿岩機を使用して掘鑿した。割目は多少存在し少許の湧水は有つたが、今日迄支保工に地壓又は其他の荷重を受けた徴候及形跡なく、又今回崩壊の終點即ち 1,048 呎左側より 996 呎右側に向ひ斜向せる岩層の裂目より坑奥に向つて岩質益々堅硬であつた。崩壊後其の終始兩端に落ち又は飛び出したもの及坑道開鑿に際し遭遇した岩質を見るに導坑及切擴掘鑿の際遭遇したものと大分異つてゐた。龜裂面多く其の表面褐色を帯びた割栗状のものであり、殆んど全部が油肌の如き滑り面を有し白紋を交へてゐた。崩壊の終點附近に落盤した岩塊中には灰色粘土又は赤土様の甚だ薄い層の破片を發見し尙破状を爲せる岩粉の多量に存するを認めた。

(7) 崩壊の原因其他

崩壊の箇所は前述の如く地質良好であり、掘鑿中何等土壓を受けることもなく、崩壊時迄何等の徴候を少しも認めなかつた。現に崩壊の當日現場掛田畑技手は細川建築工夫長及工業會社員前田恭助と共に 996 呎より 1,029 呎間穹拱煉瓦石積を 4 月 2 日より施工の目的を以て掘付たセントルの正否を調査し、尙掘鑿切擴不足の有無及支保工の如何を取り調べた所、何等の異状又は不完全な點を認めなかつた。さうして崩壊前 1 時 20 分即ち午後 3 時頃出坑した。又同所に於ける崩壊當時の作業は、側壁混凝土にして殆ど完成に近づき木外し又は衝動を起す様な危険作業を行つて居らず、之を以て見れば何等地壓又は徴候を示さずして、突然崩壊したものと認むる外なく、恐らく掘鑿に際し遭遇した岩脈堅岩の層の上部に、崩壊後わかつた軟弱の層或は斷層があり、之等は薄き堅岩に依り漸く維持して居つたのに、段々壓力加はり遂に此の岩層が突然破壊し、急激なる荷重を支保工に及ぼしたる爲意外墜落の不幸を見るに至つたものと考へられる。

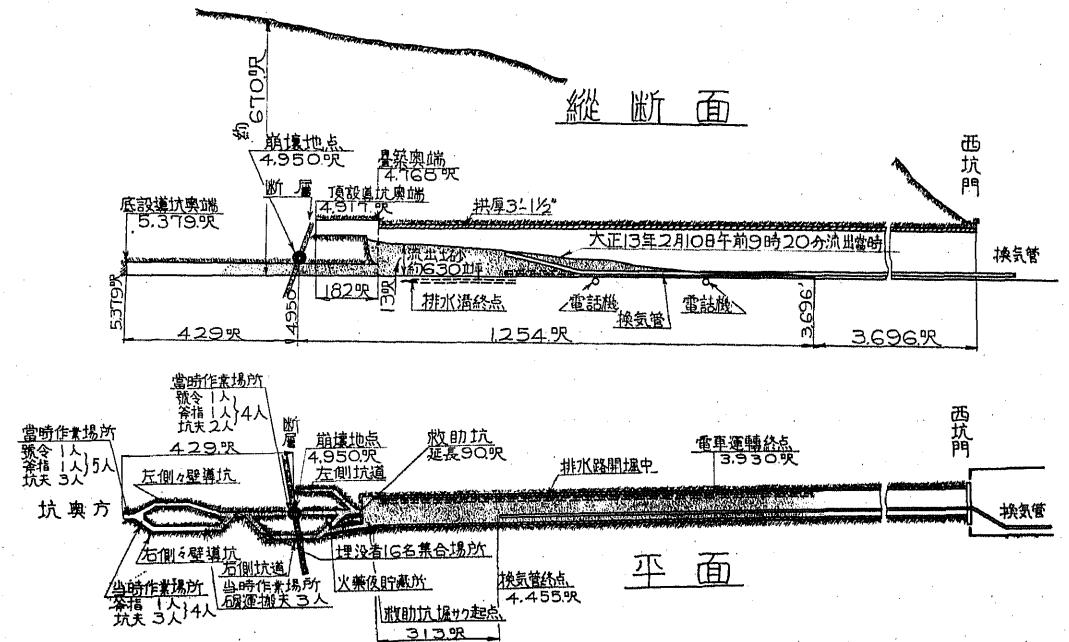
第二節 西口 4,950 呎附近事故

(1) 土砂噴出

大正 13 年 2 月 10 日午前 9 時 20 分頃、西口 4,950 呎附近の地點に於て突然土砂崩壊奔流し作業中の勞働者 18 名中 16 名埋没又は閉塞せられた。

右事故突發の際、瞬間身を以て逃れた坑夫及坑内火藥番兩名の談に依れば、突然雷鳴の如き轟音を聞いたので、一大事變と考へ坑門にに向つて、走つて逃げ出したのである、半ば液體狀の泥土は坑奥より、鐵材木材を倒して奔流し來つたのを見た云ふ。

今回の排出土砂は意外に多量にして、噴出した土砂は坑口に向ひ約 1,250 呎に亘り堆積し、其の深さ 7 尺乃至 13 尺に及び約 630 立坪に達した。流出土砂末端にも直径 4 尺大の岩塊を認むる状態であり之が復舊は容易なことではない。遭難者に對しては誠に悲惨痛苦の極である。事故發生と同時に直に坑内の状況を調査せんとしたが、何分泥土の爲坑奥に辿り着く事が困難であつた、先づ排



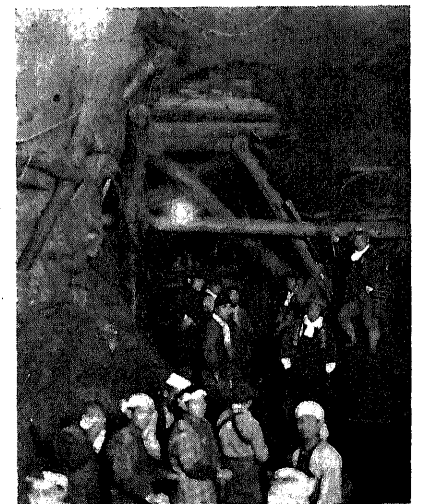
第 251 圖 西口 4,950 呎底設導坑崩壊土砂見取圖 (大正 13 年 2 月 10 日)

出泥土の上に歩み場設置の作業に着手し、一方排水構を側壁に沿つて開掘した。板敷を設け漸く目的の地點に到達したのが當日午後 8 時である。然るに奥の方頂設導坑には何等異状を認めず、其の末端の危険少き地點に救助坑を設け掘鑿に着手した。

救助作業は救助坑の掘鑿と底設導坑の水位低下の爲排水溝開掘作業の 2 つとなつた。

(2) 救助坑掘鑿

事故の發生地を坑口より 4,950 呎附近の中央底設導坑と想定すれば、本導坑は排出土砂を以て充満し湧水の流出を阻止するものと思考せらる、然るに事故後時間の経過に伴ひ清淨なる湧水停滯なく流出する現像より推察する時は右側（北側）迂迴坑道には、土砂の充満せざるものと推斷せらる故、此の坑道に通ずる救助坑を選定することとし、即ち 4,790 呎附近より延長 90 呎のものを掘鑿することとなつた。救助坑の大きさは 6 呎角で、11 日午前 3 時半より開始し 14 日午前 9 時半迄、79 呎を掘鑿



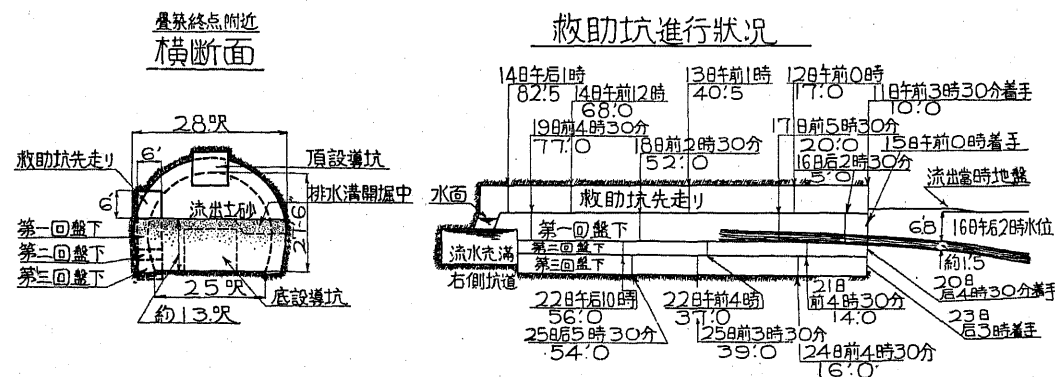
第 252 圖 救助坑掘鑿の状況

したので進捗成績は1時間1尺強である。而して14日午前4時半の進行86尺に於て鑿を以て試験的に下部に孔を穿ち5尺餘にして右側(北側)迂廻坑に貫通し、其の鑿孔より噴水約3尺位の高さに達した。左側坑道の湧水は壓力ある故、此の際直に救助坑を切擴ぐる事は出来ないで連日來の排水作業に全力を盡し水位を極力低下することに努めた。

(3) 排水溝開掘

奔出土砂は中央底設導坑の直前附近に於て約13尺の高さに堆積し坑門に向つて次第に低くなつてゐるので、救助坑の底面は隧道施工基面より約12尺半の高所に掘鑿し、堆積土砂は坑奥に湧水を阻止するので、極力堆積土砂を排除し排水溝を開掘して坑奥の水位を低下する必要を認め死力を盡して努力した。之が爲め連日各方面より労働者を召集し、12日の出勤人員510名、13日は788名を算し、尙附近町村消防隊其他の應援を受けスプリングラインより12日正午に於て、2尺7寸、13日正午に於て3尺2寸、14日正午に於て4尺2寸迄低下する事が出来た。13日午前10時に號令1名、中央底設導坑内を探險して右側(北側)導坑口に達した。土砂がなく單に滯水して居るのみであると云ふ報告を得て、一段と活氣を得たが、元來同作業は泥土の開掘延長1,200餘尺に亘ると坑内狭長なる場所に各種器具材料並に運搬線路等輻輳するので、作業を阻害すること甚しく爲に其の進捗意の如くならず、13日迄に漸く右側排水溝底より更に約3尺を低下し、左側排水溝の開掘を了り同日11時4390尺附近に於て右側より左側坑に放水せしめ、之が爲め水位が大いに低下した。救助導坑14日午後4時半累計83尺に達し已に底設導坑上部に到達した。然し乍ら排水作業は仲々進まず、漸く中央底設導坑口附近に於ける堆積土は當初13尺の深さのもの約3尺に低下することが出来た。大岩塊は松丸木類と互に縫合して堅固なる河底を構成する状態に出會し此處に排水作業は、一段困難を感じた。

16日午前2時半救助坑86尺に達し更に掘進して90尺となつた。直下の右側坑道に約2尺平



第523圖 西口4,950尺附近崩壊事故土砂流出見取圖

方の孔を開けた處湧水は其の天井を浸し更に2尺強水位上昇し坑内に岩礫が充滿して居つた。

(4) 救助坑の盤下作業

中央導坑と右側(北側)坑道との間の開掘は甚だ困難なので、救助坑の底面6尺5寸の盤下に着手した。時に15日午前零時、19日午前4時半に累計77尺に達し右側坑道に貫通した。上述貫通點に於ける孔の位置は、右側坑道天井矢板の高さに當つてゐる。之に依つて右側坑



第254圖 西口底設導坑5,000尺附近崩壊箇所奥端にあつた大岩石

道内の湧水は救助坑を通して排水し、盤下以前救助坑に開けた2尺平方の穴の水位は漸次に降下し1尺5寸程となつた。引續き救助坑盤下を90尺迄進行して、右救助坑に導水したる結果中央導坑を通ずる排水溝の流水は殆んど半減するに至つた。右側坑道内の状況を視察するに堆積岩礫は導坑内張下端の高さ迄充滿し其の上に湧水は導坑天井矢板を浸して流通する状態であつて前後には堆積岩礫を口許より排除しなければならぬ。依つて内に充滿せる土を搬出し乍ら諸所破壊された支保工に應急防禦を施しつゝ右側坑道に沿つて掘進するに至つた。第2次救助坑盤下作業(救助坑底を3尺切り下る作業)の準備に努力し、20日午後6時迄に奔出土砂は施工基面上1尺迄の排除を了り、掘鑿土砂運搬用輕便線路の延長を完了して愈々掘鑿に着手した。23日午前7時56尺(着手後61時間に進行56尺即ち1時間9寸強)の進行を見るに至り、救助坑道内の排水堰止工に近接した、之を破損する憂ある故此處に同坑第3次盤下に着手した、24日より25日夕刻迄に54尺進行する事が出来た、引續き右側坑道と盤下げ後の救助坑とを遮斷する障壁部分を掘開して此處に右側坑道を通水しつゝ掘進作業を續ける事となつた。奔出土砂(約630立坪)取除き作業は事故發生以來引續き努力遂行し殊に函南村消防隊、青年團、並に在郷軍人等の應援に依りて著しく進捗したが、20日午後6時南側は奥端迄殆んど取除きを終り右側(北側)の作業は中央導坑よりの排水路に障害せられ困難を感じたが、排水路に通風用徑30吋鐵管を假設し、尙末端に布ホース管を接續する等巧妙なる作業法に成功し23日全部奔出土砂の取除きを終了した。従つて應援團は21日を以て引上ぐるに至つた。26日午後8時40分救助坑道は右側坑道と貫通し、27日午前3時1名の屍體を、3時40分2名の屍體を、5時3名の屍體を、5時10分7名の屍體を右側坑道の中央部(自5,016尺至4,917尺間)に於て發見收容した。之より遭難者全部の收容を了り27日午前6時迄に囑託醫は警官立合の上検屍を了し直ちに納棺した。

埋没者	兵庫縣	戸主	福田清次
號令	山梨縣	戸主	羽田文作
斧指	大分縣		伊藤唯次
斧指	秋田縣		高橋吉太郎
坑夫	廣島縣		三島清太郎
坑夫	静岡縣		井上近秋
坑夫	福島縣		兒玉長太郎
號令	大阪府	戸主	横山松太郎
斧指	滋賀縣	戸主	松本源太郎
坑夫	佐賀縣		上田淺次郎
坑夫	朝鮮	金白龍事,	福本伯太郎
坑夫	岐阜縣		小林金一
坑夫	栃木縣		渡邊登
土工	沖繩縣		王城新助
土工	茨城縣		柏鐵之助
生存者			
坑夫	大分縣		淺利隆三
土工	静岡縣		安藤一郎
火藥掛	静岡縣		佐野芳太郎



第 255 圖 殉職者祭典



第 256 圖 殉職者葬列

(5) 崩壊箇所附近の状況

土砂を取除き各坑道を調査した所、左右兩側坑道共噴出の土砂が逆流したものであつた、左側坑道は坑口は閉塞せられてゐるが、坑奥に向つて順次下り匂配を示して居つた、右側坑道は土砂逆流し支保構には少しも異状を認めず、中央底設導坑は、右側坑道との交叉部に土運車轉倒し其の背後には大玉石が轉つて居り、噴出土砂を此處で止めてしまつた様である。此の裏に約 2 呎程の隙間があり、辛じて 4,942 呎附近まで行く事が出来た、4,978 呎附近の電燈々球は破損もせず其の儘の状態であつた。尙 4,958 呎附近掘鑿中不良土質に遇ひ鐵製支保構を施した箇所は鐵製支保構が其の儘であつた、4,943.5 呎の邊は全く填塞して居り湧水は 4,960 呎附近が最も多かつた。

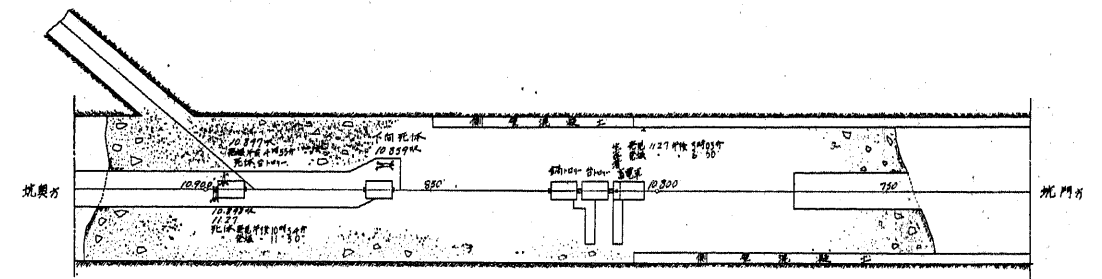
(6) 崩壊の原因

頂設導坑、右側坑道及坑奥側底設導坑 4,943 呎附近が無事である點から見て、崩壊した部分の延長は 30 呎未滿の様考へられる。左側坑道の幾分が異状を來した感があるが、此の崩壊箇所と考へらるゝ 30 呎の區間は其の後明かとはなつたが、所謂斷層帶の區間であつて何回となく崩壊を來しつつ、縫返し作業に移つたのである故、地質の不良區間を更に惡質のものとしたのであつた。又崩壊の爲に玉石の間の砂質部分を流して、がらがらの玉石許りにしてゐたので、此の玉石を取り乍

ら矢板打作業は仲々困難であつた。其の手當に幾分悪い處が有つた爲か 1 つの石の取外しが機縁となつて、上部の惡質部分が崩壊して此の慘事を惹起したものらしい。崩壊の際仕事をしてゐたかどうか、前の番の者が直ぐ仕事を續ける様に頼んで出たが、まだ仕事にかゝつては居ない時間だとも云ひ、其の關係者が皆犠牲者となつたので、仕事にかゝつてゐなかつたか、荷がかゝつて來て崩壊となつたか、其の點明かでない。然し乍ら崩壊は全く瞬時のうちに、細かい口から非常に多量の土砂を流出したものの様である。

第三節 西口 10,800 呎附近崩壊事故

昭和 5 年 11 月 26 日午前 4 時頃北伊豆地方大地震の爲西口坑門より 10,800 呎附近切擴箇所が崩壊し 5 名埋没された。2 名は救助され 3 名殉職したのである。



第 257 圖 西口 10,800 呎附近土砂崩壊救助作業状況圖

北伊豆地震に依る崩壊の際隧道外の住居其他の被害も相當あつた。埋没せられたものは次の通りである。

掘出夫	朴順介	28 歳
蓄電車運轉手	沼澤龜五郎	28 歳
連結手	李賢梓	22 歳
掘出夫	金芳彦	41 歳
同	孫壽日	31 歳

之より先き崩壊と共に坑内で作業中の者は北側水抜坑に 7 名がボーリング作業中であり、又切擴區間では 15 名が従業してゐたのである。所がボーリング組は異様の震動と音響に驚いて、直に南側水抜坑を通過して脱出し、切擴組は 15 名中の 12 名位は壘築箇所に休憩中であつたのである。此の切擴組は崩壊を直に知つて、人員の點呼をした所 5 名不足したので、直に八方搜索したが見當らず依つて埋没せられたものとして坑外の事務所に報告されたのである。

崩壊箇所は掘鑿材料の外に壘築材料もあり、其の上照明、送風、運搬線等は坑外の震災の爲め其

の設備が破壊されたので救助作業は大いに困難を感じたのである。

埋没者の中村順介は自力で土砂中から這ひ出し暗黒の隧道中を彷徨中 26 日午後 3 時救助隊に発見せられ、續いて翌 27 日午後 6 時蓄電池機關車中に居た運轉手沼澤龜五郎を無事救出し、同日午後 11 時礪出夫金芳彦の屍體を發見搬出し、更に 28 日午前 3 時礪出夫壽孫白の屍體を收容し 30 日午前 3 時最後の連結手李賢梓の屍體を發見したのである。

第四節 死傷者數其他

上記三重大事故以外に負傷又は死亡した者は多數であるが、其の大部分は切投又は請負工事の爲に

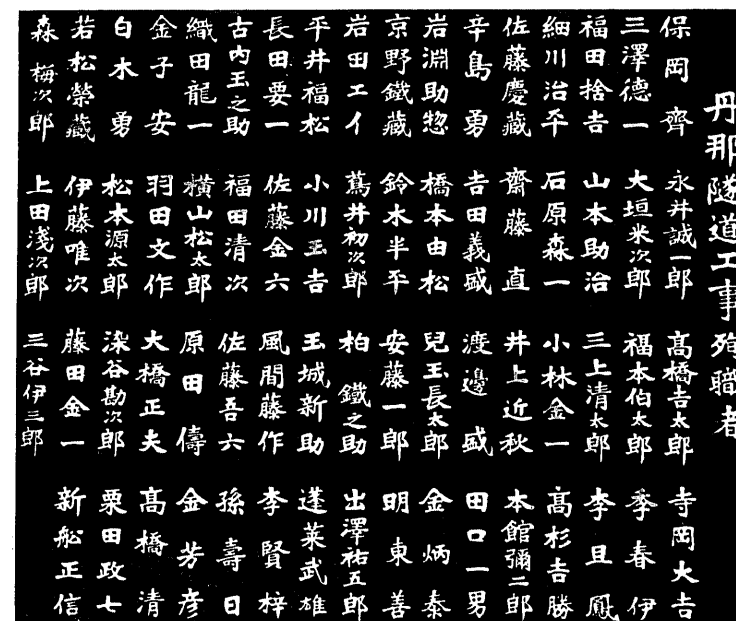
官 職	死 亡		重 傷		輕 傷		合 計
	熱 海	大 竹	熱 海	大 竹	熱 海	大 竹	
技 師						1	1
技 手					1	2	3
鐵 道 手						1	1
雇 (技 術)				3	6	7	16
轉 轍 手			1		7		8
連 結 手					1		1
庫 內 手					1		1
制 動 手					6		6
技 工			7	2	80	45	134
倉 庫 手					23	3	26
機 關 方 心 得		1	1	2	5	3	11
機 關 方 見 習			1			1	2
機 關 方 助 手						4	4
機 關 火 夫					1		1
定 備 手					16	8	24
夜 番						1	1
線 路 工 手 長					1	4	5
線 路 工 手				1	17	21	39
建 築 工 手 長	1		1		1	1	4
建 築 工 手			4	1	21	8	34
電 力 工 手 長					1	1	2
電 力 工 手					4	2	6
電 力 工 手 傳						1	1
合 計	1	1	15	9	193	115	334

之が救済は請負人側に於て處分されたので明瞭でない。但し直接工事に關して死亡した者は 67 名であつて、丹那隧道完成に際し東口坑口に造つた殉職碑に上記の殉職者氏名を印刷してある。尙省從事員の負傷死亡等は前表の通りである。

前表中死亡の熱海口建築工手長 1 は大正 10 年 4 月 1 日の大事故の際死亡したものである。又大竹口機關方心得 1 は昭和 7 年 11 月中西口北側迂迴坑 (西口坑門より 11,000 呎附近) で地質調査のボーリング中機械に捲き込まれて遂に死亡するに至つたのである。

此の省從事員及請負人側の死亡者に對する省から支辨された見舞等の總額は次の通りである。

療 養 料	13,536.000
見 舞 金	4,532.000
計	18,068.000



第 258 圖 丹那隧道殉職碑殉職者銘版